The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	揚雄『法言』における摸倣と創造
Author(s)	弛, 和順
Citation	中国研究集刊. 2002, 30, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

揚雄『法言』における摸倣と創造

弛　和順

問題の所在

前漢末より新にかけて活躍した揚雄（前五三～後一八）は、辞賦をはじめとして『太玄』『法言』『訓纂』『方言』など、実に多様な著作を遺したが、それらの特徴を一言すれば、既存の作品を摸倣したものが多い点を挙げられよう。それに関して、『漢書』揚雄伝には「経は『易』より大なるは莫く、故に『太玄』を作る。伝は『論語』より大なるは莫く、『法言』を作る。史篇は『倉頡』より善なるは莫く、『訓纂』を作る……皆、其の本を斟酌し、相与に放依して馳騁して云ふ」と記述されているように、みずから『易』『論語』『倉頡篇』を評価したことが、揚雄をして各書に擬して『太玄』『法言』『訓纂』を編ましめたという。

では、それらの著作において、揚雄が多用した摸倣とは、どのような表現手段であっただろうか。揚雄以後、その著述における摸倣をとりあげては、それに毀誉褒貶を加えた評者は多いのだが、その大半が抽象的な論に終始するだけで、摸倣の実態を明らかにしたものは少なく、ましてや摸倣とは何かという基本的かつ根本的な問題に挑んだ論考はないように思われる。しかし、揚雄の著作を研究するに当っては、まず摸倣自体に対する考究が不可欠であろうし、またそれなくして揚雄の思想・文学を語ることは十全とはいえないであろう(注1)。

小論は、数多ある揚雄の述作から、その代表的著作『法言』をとりあげ、同書における摸倣という表現手段について考察しようとするものである。具体的には、『法言』における摸倣の実態を精査するとともに、摸倣の類型化を図ることを通して、揚雄が用いた摸倣の特徴の解明を試みたい。その上で、摸倣とは相反する概念、創造という視点からも一考し、それが『法言』中において存するか否かについても論及したいと思う。

『法言』における摸倣の意義

今日の我々から見れば、その著作活動において、摸倣という表現手段を意識して用いることは、決して許容することのできない行為であろう。万一、著作中に意図的な摸倣が存在し、それが実証されたならば、当事者は、独創性の欠如という面のみならず、倫理的な側面からも批判を受けるであろうし、またその作品も亜流との謗りを免れえないであろう。このようないわば現代的な感覚をもって、揚雄『法言』における摸倣について言及したものも少なくない。たとえば、狩野直喜氏は、揚雄の『法言』や『太玄』に対して、次のようにいう。

法言は論語に擬し、太玄は易に擬して作ったものである。彼の考に据れば、儒家の書で易と論語とに若くものはないと、そこで二書に摸倣して此の二著をなしたのである。しかし余が此の二書を見て感ずるは、其の外形を摸倣することの甚だしくして、内容の浅薄なることである。公平に論じて、到底荀子等先秦諸子に比すべきものではない。此を見ても、漢時代の学者が如何に創見の力に乏しく、唯古典のみに心酔し、其の摸擬にのみ志したかが分るのである。法言は其の行文、枉げて論語に擬し、頗る滑稽であるが、猶ほ格言として取るべきものないでもない(注2)。

狩野氏は、『法言』には外形上の摸倣が顕著に見られ、その影響は内容面にも及び、その浅薄なること、諸子百家の書に比較できないほどであると、その価値をほぼ全面的に否定するのである。

なるほど『法言』を繙けば、文章体裁上の摸倣が随所に認められるのは確かだが、しかし、それがすぐさま内容の価値の低下に直結するというのは、あまりにも画一的な見方だといわざるをえない。文章と内容は不可分の関係にあるのは勿論であるが、その両者の価値がすべて合致するとは断じえないからである。

一方、揚雄にはもとより独創性が乏しく、ために摸倣という方法以外に表現手段をもちえなかったという見方も想定できないわけではない。しかし、その多彩な著述の一端を垣間見れば、そのような否定的な見方はすぐさま打消されるように思われる。だとすれば、揚雄の場合は、たぐい稀なる文才を有しながら、また同時に十二分に批判されることを知悉しながら、あえて摸倣という表現手段に挑んだことが予想されるのである。そのように考えれば、摸倣という表現手段は、揚雄にとって特別な

意味合いをもつ行為であったと見ることができよう。

『法言』における摸倣の類型

『法言』における摸倣に関しては、たとえば、池田秀三氏が「『論語』にかたどったと伝えられるが、この『論語』への模倣は単に文章体裁のみならず、思想的内容にまで及んでいる」というのが、簡潔にして適確な解説であろうと思われる(注3)。つまり、『法言』の摸倣には、文章体裁面および主張内容面の、二つの性格が存するのである。かつて筆者は、『法言』をとりあげ、揚雄が『論語』を摸倣した意図を探究したことがあるが、それに際して、同書における摸倣を、池田氏同様、文章体裁面の摸倣と主張内容面のそれとに分類しながら、自説を展開したものの、摸倣の特徴に関して、それ以上、論究することができなかった(注4)。が、その後、改めて『法言』を通読するうちに、その摸倣のもつ二面性が、実は『法言』における文体と少なからぬ関係を有するのではないかと考えるに至った。因みに、ここでいう文体とは、作品において特別に見られる文章の特色や傾向ではなく、文章の体裁・様式の型を意味するものである。

このような観点から『法言』全体の文体を総覧すると、ほぼ二つの形態に分類することができる。一つは語録体であり、おそらくは揚雄の独白した言葉が記録されたであろうもの。そして、いま一つは問答体であり、揚雄とその弟子や門人との間で交わされたという問答が筆録されたと推測されるものである。

かように『法言』においては二種類の文体が混在するわけだが、これは、明らかに『論語』の文体を模倣したものであろう。すなわち『論語』においては、孔子の独言を記録したと考えられる語録体と、孔子とその弟子や門人との問答を記したと思われる問答体とが認められるが、当然のことながら、揚雄は、二種類の文体が混在する『論語』の体裁に範をとりながら、それを『法言』の文体に採用したものと思われる。そこで、以下、『法言』における文体を二種類に分けて、揚雄の用いた『論語』よりの摸倣について具体的な検討を行いたい。

『法言』の語録体に見える摸倣

まず、揚雄自身の独白と思われる語録体の中から、摸倣の典型的な例を三条示すこととする。

①吾未見好斧藻其徳若斧藻其棄者也。(吾、未だ其の徳

を斧藻にするを好むこと、其の棄を斧藻にするがごとくなる者を見ざるなり。(注5)　(学行篇)

「斧藻」とは、元来、斧形や水草の文様の意、ひいて家屋に華麗な装飾をほどこすこと。「棄」は、家屋の梁上の枡形の意。「其の棄を斧藻にす」とは、『論語』公冶長篇に見える「山節藻梲（節を山にし梲を藻にす）」という表現を利用したもの。つまり「自分の家屋を装飾するのと同じように、自分の人格を美しくする人物に、私は出会ったことがない」というのが揚雄の趣旨である。また文章全体の体裁は、『論語』子罕篇における孔子の語「吾未見好徳如好色者也。（吾、未だ徳を好むこと、色を好むがごとくなる者を見ざるなり。）」、および衛霊公篇における孔子の語「已矣乎、吾未見好徳如好色者也。（已んぬるかな、吾、未だ徳を好むこと、色を好むがごとくなる者を見ざるなり。）」を摸倣した表現であること、明白である。『法言』の主眼は、『論語』同様、「徳」を重視した点にあるが、『論語』が「色」と比較したのに対して、『法言』は外見を象徴する「棄」と比較した点が異なるといえる。

②古者、楊墨塞路、孟子辞而闢之廓如也。後之塞路者有矣。窃自比於孟子。（古者、楊・墨、路を塞ぎ、孟子辞してこれを闢きて廓如たり。後の路を塞ぐ者あり。窃かに自ら孟子に比す。）　(吾子篇)

揚雄は、数ある先人の中から孟子を最も評価し、次のようにいう。「かつて楊朱や墨翟は異説を唱えて聖人の道を塞いだが、孟子は弁舌をもって対抗し、その道を明らかにした。その後も聖人の道を塞ぐ者がいるので、私はひそかに自分を孟子に準えている」と。揚雄の決意が明確に示された文章といえるが、その中で末尾の一文「窃かに自ら孟子に比す」とは、『論語』述而篇における孔子の言葉「窃比於我老彭。（窃かに我を老彭に比す。）」を襲った表現であることに間違いはない。

なお、『論語』に見える「老彭」という表現に関しては、古来、解釈が分かれるところである。前漢の包咸は、老彭という殷の賢大夫一人を指すと述べるが（『集解』所引の説）、後漢の鄭玄は、老子と彭祖との二人を意味するという（『経典釈文』所引の説）。いま揚雄の場合、同じ一文に擬して「窃かに自ら孟子に比す」と述べていることから推して、「老彭」をば、老彭という一人物として理解していた可能性の高いことが知られる。

③孝、至矣乎。一言而該、聖人不加焉。（孝は、至れるかな。一言にして該ね、聖人も加へず。）　(孝至篇)

揚雄は、孝の徳を重要視していう。「孝行は最高の徳である。ただ孝という一言ですべての徳を兼ねており、たとえ聖人でも何も付け加えるものがない」と。いま冒頭の「孝は、至れるかな」とは、『論語』雍也篇における孔子の言「中庸之為徳也、其至矣乎（中庸の徳たるや、其れ至れるかな）」を摸倣した表現であろう。孔子が中庸を説いた文章を借りて、揚雄は孝の必要を述べたのである。また「一言にして該ぬ」については、為政篇における孔子の言「詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪（詩三百、一言以てこれを蔽ふ、曰く思ひ邪なし）」、あるいは衛霊公篇における問答「子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人。（子貢問ひて曰く、一言にして以て終身これを行ふべき者ありやと。子曰く、其れ恕か、己の欲せざる所、人に施すこと勿れと。）」を意識して利用したものと考えられる。

右に提示した三例は、いずれも揚雄がみずから発言したものを録したものだと考えられるが、そこで用いられている摸倣とは、すべて文章体裁上のものに限られている。換言すれば、『法言』の語録体において、揚雄は、『論語』の文章体裁のみを摸倣し、内容については全く摸倣を行っていないのである。したがって、その主張内容については、たとえば、①外見よりも内面における徳の必要性を説いた点、②孟子を評価し尊崇した点、③孝の重要性を説いた点は、揚雄個人の見解が色濃く反映されたものだといえよう。

『法言』の問答体に見える摸倣

今度は、揚雄と弟子や門人との問答体における摸倣に関する考察を行うが、それに先立ち、『法言』に見える問答は、果して揚雄がその弟子や門人と実際に行ったものであるのか、確認しておく必要があろう。そこで、まずは問答が実在したかどうかについて一考しておきたい。

そもそも『論語』に見える問答体とは、孔子と弟子や門人との間において問答が行われ、その記録に基いて、現在の『論語』が編まれたと考えてよいだろうが、一方、『法言』における問答体については、問答そのものが実際に存在したのか、はなはだ疑わしい。たとえば、『法言』学行篇と問道篇には、『論語』の同一章を踏まえた問答が認められる。

○或ひと、進むを問ふ。曰く「水なり」。或ひと曰く「其の昼夜を捨てざるが為か」。曰く「是れあるかな。満ちて後に漸む者は其れ水か」。（学行篇）

○或ひと、道を問ふ。曰く「道は塗のごとく、川のごとし。車航混混として、昼夜を捨てず」。
（問道篇）

いま右に示した二つの問答は、いずれも『論語』子罕篇に見える孔子の言葉「逝者如斯夫、不舍昼夜（逝く者は斯くのごときか、昼夜を舍てず）」に依拠したものであることは明らかである。末文の「不舍昼夜」の「舍」字については、揚雄の理解に従って、暫定的に「すてる」と訓じておくが、実は、この「舍」字は、古来、『論語』注釈においても訓詁が一定しておらず、「止（とどまる）」（邢昺『注疏』）・「已（やむ）」（朱子『集注』）など、解釈に相違が見られる文字である。その中、『法言』の場合、学行篇では質問者の発言中に、問道篇では回答者の発言中に同句が引かれ、いずれも「舍」が「捨」に置き換えられている。このことから推して、質問者の発言と回答者の発言とが同一人物によって行われた可能性がまず考えられる。いや、もし本来は異なる人物によって発言されたものであったとしても、『法言』成立の最終的な段階においては、揚雄その人の手が加えられた可能性が高いことも指摘できる。ともあれ、『法言』は、使用される文字が全巻統一されるほどに緊張感をもって編集された著作であることに相違なく、それらの点を勘案すれば、元来、揚雄が自問自答しつつ、著述した可能性がきわめて高い書物だといえるのである。

そこで『法言』における問答体は、揚雄自身の自問自答であったという仮説のもと、本題である問答体における摸倣について、以下四条を提示しながら、検討を進めることとしたい。

④或曰「述而不作。玄何以作」。曰「其事則述。其書則作」。（或ひと曰く「述べて作らずと。玄は何を以て作る」。曰く「其の事は則ち述ぶ。其の書は則ち作る」。）
（問神篇）

ここでの問答は、『太玄』の著述目的について交わされたものである。ある人がいった「述べて作らずというが、どうして『太玄』を作ったのですか」。答えた「『太玄』では聖人の道を述べたものである。その書自体は作ったものであるが」。最初に質問者が引用した「述べて作らず」とは、いうまでもなく『論語』述而篇に見える孔子の言「述而不作、信而好古（述べて作らず、信じて古を好む）」を踏まえたものである。これは、摸倣といっても文章体裁上のものではない。もし自問自答だとすれば、揚雄が孔子の言葉をそのまま利用して質問を設定し、回答において、その意味内容を解説しながら、『太玄』の制作意図

を開陳したことになろう。

⑤或曰「請問屢空之内」。曰「顔不孔、雖得天下、不足以為楽」。「然亦有苦乎」。曰「顔苦孔之卓之至也」。或人瞿然曰「茲苦也、祇其所以為楽也与」。（或ひと曰く「屢々空しきの内を請ひ問ふ」。曰く「顔は孔にあらざれば、天下を得と雖も、楽しみと為すに足らず」。「然らばまた苦しむことありや」。曰く「顔は孔の卓の至れるを苦しむなり」。或ひと瞿然として曰く「茲の苦しみや、祇に其の楽しみと為す所以なるか」。）（学行篇）

これは、顔淵の楽しみをめぐって交わされた問答である。ある人が問うた「しばしば困窮したという顔淵の心中をおたずねします」。答えた「顔淵は孔子の道を獲得できなければ、天下を得たとしても楽しむに足りなかったのだ」。問うた「そうだとすると苦しむこともあったでしょうね」。答えた「顔淵は孔子があまりにも優れ、到達できないことを苦しんだのだ」。ある人は驚いていった「その苦しみこそ、まさに顔淵の楽しみだったのですね」。以上が問答であるが、その最初の質問「屢々空しきの内を請ひ問ふ」とは、『論語』先進篇に見える孔子の言「回也其庶乎、屢空。（回や其れ庶きか、屢々空し。）」を踏まえ、その内容を問うたものである。また後半の回答に「顔は孔の卓の至れるを苦しむなり」とあるのは、『論語』子罕篇において、顔淵が孔子の偉大さを嘆じた言葉「立つ所ありて卓爾たるがごとし。これに従はんと欲すと雖も、由るなきのみ」を意識し、その字句を利用して答えたものだといえよう。つまり、ここでは先進篇における孔子の発言内容をたずねる形で質問が行われ、子罕篇における顔淵の発言をそのまま用いて回答がなされているのである。

⑥或問文。曰「訓」。問武。曰「克」。未達。曰「事得其序之謂訓。勝己之私之謂克」。（或ひと文を問ふ。曰く「訓なり」。武を問ふ。曰く「克なり」。未だ達せず。曰く「事、其の序を得る、これを訓と謂ふ。己の私に勝つ、これを克と謂ふ」。）（問神篇）

ここにおける問答は、文と武の内容をめぐるものである。質問者が文を問うたので答えた「訓である」。武を問うたので答えた「克である」。まだ理解できていないので、「物事が理に適うことを訓といい、自己の私心に勝つことを克という」と述べた。いまこの問答全体の形式に着目すれば、すぐさま『論語』顔淵篇における孔子と門人樊遲との問答を摸倣したものであることが想起されよう。

樊遲問仁。子曰「愛人」。問知。子曰「知人」。樊遲未達。子曰「挙直錯諸枉、能使枉者直」。（樊遲、仁を問ふ。子曰く「人を愛す」。知を問ふ。子曰く「人を知る」。樊遲未だ達せず。子曰く「直きを挙げてこれを枉れるに錯けば、能く枉れる者をして直からしめん」。

右の通り、『論語』の問答は、樊遲が仁や知について質問したので、孔子がそれに短く答えたが、樊遲は十分理解できなかったため、改めて孔子が解説したという形式になっている。その形式を摸倣し、揚雄は、質問者が訓や克について尋ねたので答えたが、理解が得られず、ために揚雄が平易に説明し直すという設定を用いたものと想像される。両書が主張する内容は異なるが、その問答形式において、摸倣が行われていることは明白であろう。

さらに、この問答においては、最後の一文「己の私に勝つ、これを克と謂ふ」にも目を向けなければならない。というのは、同文が『論語』顔淵篇に見える孔子の言葉「克己復礼為仁（己に克ち礼に復るを仁と為す）」を典拠とした表現だからである。この表現は、『論語』の内容面を踏襲したものだといえるが、ここでは『論語』の「克己」に対して、揚雄が「勝己」と述べ、自制する意に理解していたことまで分る。その点において、揚雄独自の『論語』解釈の一端がうかがえる問答だともいえよう（注6）。

⑦或欲学蒼頡史篇。曰「史乎、史乎。愈於妄闕也」。（或ひと蒼頡・史篇を学ばんと欲す。曰く「史なるかな、史なるかな。妄りに闕くるに愈れり」。）（吾子篇）

この問答では、字書が話題に上り、その効用が語られている。質問者が『蒼頡篇』『史籀篇』を学ぼうとするので述べた「史官として立派だね。誤字を書いたり、知らずに空白にするより勝っている」。短い問答だが、その回答において「史なるかな、史なるかな」というのは、『論語』憲問篇において、孔子が蘧伯玉の立派な使者ぶりを評して語った言葉「使乎、使乎（使いなるかな、使いなるかな）」を襲った表現だと考えられる。この表現は、文章体裁上の摸倣であることはいうまでもあるまい。

なお、『法言』中の問答体においては、こうした簡潔な表現が随所に見えるが、その多くは、『論語』の文章体裁を利用したものである。以下、ごく一部ではあるが、そのような例を挙げると、『法言』学行篇に見える回答「未之思也（未だこれを思はざるなり）」とは『論語』子罕篇に見える「未之思也、夫何遠之有（未だこれを思はざるなり、夫れ何ぞ遠きことかこれあらん）」に倣ったもので

あり、また『法言』問明篇に見える回答「不亦貞乎……不亦利乎……不亦亨乎（また貞ならずや……また利ならずや……また亨らずや）」は『論語』学而篇における「不亦説乎……不亦楽乎……不亦君子乎（また説ばしからずや……また楽しからずや……また君子ならずや）」に基いた表現といえる。

以上、『法言』の問答体における摸倣の典型的なものとして、四例を掲げたが、それらを概括すると、④では述而篇の内容上の摸倣、⑤では先進篇・子罕篇の内容上の摸倣、⑥では顔淵篇の内容上の摸倣というように、問答体の多くは『論語』の内容を踏まえて行われていることが分る。この内容面における摸倣というのは、先述した通り、揚雄の語録体には全く見えない形態である。また、その内容上の摸倣は、揚雄の『論語』解釈を披瀝する場であったと見ることも可能であり、問答が交わされる中で『論語』の文章が話題となり、やがて問答が進行するにつれて、その内容が深まる場合も少なくない。そのような点からいえば、問答体における内容上の摸倣とは、揚雄の『論語』注釈の一部だといえなくもない。

また、問答体においては、単に内容面の摸倣に止まらず、たとえば⑥のように、顔淵篇における文章の形式全体を摸倣した例があるかと思えば、さらに⑦に示したように、簡潔な文章体裁を摸倣した例も多数見られることを指摘しておく。

『法言』における独創

以上の考察を通して、『法言』には文章体裁における摸倣と主張内容における摸倣とが存在し、仮に同書の文体を語録体と問答体とに分類するならば、語録体においては、文章体裁における摸倣のみが見られるのに対して、問答体においては、主張内容における摸倣が主として認められることが明らかになった。このように『法言』における摸倣表現は枚挙に遑がないほど多いのだが、それでは、同書は摸倣に終始するばかりで、何ら創造的な側面が存在しないのかといえば、必ずしもそう断言できるわけでもない。

たとえば、孝至篇における揚雄語録体の中に次のような一文が見える。

周公以来、未有漢公之懿也。（周公より以来、未だ漢公の懿あらざるなり。）

この文章は、表現面からいえば、『論語』ではなく『孟子』公孫丑上篇に見える孟子の言「自生民以来、未有夫

子也（生民より以来、未だ夫子あらざるなり）」あるいは「生民より以来、未だ孔子より盛んなるはあらざるなり」を摸倣したものであり、通例、漢公すなわち王莽を賛美した発言と考えられている。つまり、この文章は、文章体裁においては、明らかに摸倣表現を用いているのだが、その裏にはきわめて鮮明な主張が込められていることがうかがえるのである。だとすれば、揚雄自身、人物批評に関することだからであろうか、あえて直接表現を回避し、間接表現による摸倣という手段を使用した可能性も考えられなくもない(注7)。

このような視点をもって、いま一度『法言』における語録体を中心としつつ、あわせて問答体についても、文章体裁上の摸倣が行われている部分を細見していけば、そこには摸倣という形式を借りながらも、その中で揚雄独自の主張がいかに多く展開されているかということに気がつくであろう。翻ってみれば、そもそも揚雄が摸倣という表現手段を用いること自体、独創的な行為であったといえるのだが、その文章体裁上の摸倣の内側に潜む揚雄の主張そのものもきわめて創造的なものであったといえるのである。

注

(1)『法言』に関する研究の中で、代表的な論考を掲げると、次の通りである。

・狩野直喜「楊雄と法言」(『支那学』三―六、一九二三年)後に『支那学文藪』(みすず書房、一九七三年)に収録。

・池田秀三「『法言』の思想」(『日本中国学会報』二十九、一九七七年)

・町田三郎「揚雄について(二)」(『秦漢思想史の研究』創文社、一九八五年)

・田中麻紗巳「楊雄と王莽・新」(『両漢思想の研究』研文出版、一九八六年)

・徐復観「楊雄論究」(『増訂両漢思想史』巻二、学生書局、一九七六年)

また『法言』に対する注釈書も多数存するが、最も詳細なものとして、汪栄宝『法言義疏』(新編諸子集成第一輯所収、中華書局、一九八七年)を挙げることができる。さらに最近、中国で発刊されたものに、韓敬『法言注』(中華書局、一九九二年)、韓敬『法言全訳』(巴蜀書社、一九九九年)がある。一方、邦訳されたものとしては、鈴木喜一『法言』(中国古典新書、明徳出版社、一九七二年)、田中麻紗

巳『法言』（中国の古典、講談社、一九八八年）がある。ただし、以上の書は、いずれも『論語』の摸倣に関する記述が簡素であり、その典拠の指摘もごく一部に限られている。

（2）『中国哲学史』二七九頁（岩波書店、一九五三年）。

（3）日原利国編『中国思想辞典』三七六頁「法言」の項（研文出版、一九八四年）。

（4）拙稿「揚雄『法言』と『論語』――摸倣の意図――」（松川健二編『論語の思想史』汲古書院、一九九四年）。

（5）以下、『法言』から原文の引用を行う際は、汪栄宝『法言義疏』を底本とする。ただし、標点については、従わなかった箇所もある。

（6）「克己」に関しては、たとえば、何晏『集解』所引の馬融注に「克己、約身也」という。これに従えば、身を引き締める意となる。

（7）『法言』における人物批評に関しては、拙稿「揚雄『法言』における人物評論」（『中国古典研究』三十八、一九九三年）参照。